

中国との原子力災害医療交流と 防護・リスク研究の幕開け



福島県立医科大学
副学長・理事長特別補佐
(長崎大学名誉教授)

山下 俊一

略歴: 1978年 長崎大学医学部卒業
1990年 長崎大学教授(医学部附属原爆後障害医療研究施設)
2004年 WHO放射線プログラム専門科学官
2009年 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長
2011年 福島県立医科大学副学長・福島県放射線健康リスク管理アドバイザー
2013年 長崎大学理事・副学長
2018年 長崎大学名誉教授
現職: 福島県立医科大学副学長・理事長特別補佐
国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構高度被ばく医療センター長
内閣官房原子力災害医療専門家

長崎と中国との交流は古く、空海や鑑真和尚の時代から、そして江戸時代の鎖国の中にあっても、中国文化や宗教(黄檗宗)の輸入経路の一つであった。明治維新後の長崎―上海航路の交流は、日中戦争での中断を余儀なくされたものの、1972年の日中国交正常化を受けて未来志向型の地域連携(福州市と福建省)が強化されている。春節祭を起源とする長崎ランタンフェスティバルも評判となっている。

この間の出来事として、1950年代からの大気圏核実験が世界中に放射性降下物をもたらし、東西冷戦構造下での中国の核実験への参入により核開発競争は深刻さを増し、1986年のチェルノブイリ原発事故を受け、1991年12月にはソ連崩壊へと進んだ。

私が、中国との関係の大切さを学んだのは、長崎大学第一内科4代目教授として1980年暮れに東京大学から赴任された長瀧重信教授(1932-2016)のご指導による。1987年日本核医学会学術集会が長崎で開催され、「チェルノブイリと甲状腺がん」という中心テーマがそのまま私自身のライフワークになった。長瀧教授は日中や日韓の甲状腺研究者の共同プロジェクト推進を重要視され、1978年にアジア大洋州甲状腺学会 AOTA が創立されると、1985年から15年間 AOTA 会長として日中韓での甲状腺交流を主導されている。この頃から日中笹川医学奨学金制度に合格した留学生を長崎大学でも不定期に受け入れてきた。長崎大学での留学生数は圧倒的に中国からの学生や研究者が多いが、特に、感染症研究や熱帯医学・グローバルヘルス研究ではその交流が重要な位置付けを占めている。

一方、長崎は広島に次ぐ第二の原爆被爆地であることが夙に人口に膾炙している。そのため放射線の健康影響、とりわけ発がん研究が医学分野では盛んであり、旧ソ連圏からの留学生が多い。日中交流の

研究課題の一つが、放射線医学(核医学)すなわち放射性ヨウ素を利用したバセドウ病や甲状腺がんの内用治療であり、同時に原子力事故などによる放射線被ばく後の発がんリスクの研究である。日中笹川医学奨学金制度での留学生らはこの分野でも大きな役割が期待される。さて、AOTA学会は、それより歴史が古い国際甲状腺学会 ITC の一地域組織であり、アメリカ甲状腺学会 ATA、ヨーロッパ甲状腺学会 ETA、ラテンアメリカ甲状腺学会 LATS とともに5年に一度の国際会議を開催しているが、2020年9月には中国・西安で第16回 ITC が開催予定であり、更なる日中交流の活性化が期待されている。

現在、私自身は福島原発事故後の風評と風化対策にあたっているが、来年夏開催予定の東京オリンピック・パラリンピックを控えて、正しい福島情報を世界に発信すること、さらに放射線リスク対応への準備と対策を国際協力の中で進める役割を担っている。原爆被災、笹川チェルノブイリ医療協力、福島原発事故を経験した日本は、これからの日中関係において放射線医学総合研究のみならず、原子力災害医療の人材育成と防護研究、包括的健康リスク対応や治療面においての貢献が求められている。



長崎大学熱帯医学ミュージアムを視察する中国の若手研究者